

シニアフレンズ福岡

SENIOR FRIENDS FUKUOKA NEWS

日本のことわざに「情けは人のためならず」というのがある。人に情けをかけたおかげ、めぐりめぐって良い報いがある、という意味だそう。善行はやがて自分に得をもたらすというわけだ。

しかしボランティアに関わっているせい、どうもこの解釈が気に入らない。将来に報われることを説いて、善行を奨励しているかにみえるからだ。功利を目的とした善行だ。

しかしそもそも人間、ボンヤリした将来の利益を目的に、一文にもならぬことなどしないものだ。

ボランティアにとって、その活動は、それ自体、自分の喜びである。世のため人のためと信じてなされる行為、いわば情けをかけるその行為は、ただちに自分の喜びとなってハネ返っている。相手の幸せが、すなわち自分の幸せなのだ。したがってそれは、私利私欲を超えた社会性・公共性を帯びている。

情けは人のためならず

以上のことは、ボランティアを体験している人ならば必ず共感されることだろう。

先の解釈は、外にあって善行を傍観する者のつぶやきだ。あるいは、不本意に善行を強いられた者への慰めの言葉に似ている。善行ならぬ「善行」など、たかが知れている。どうせ長続きはしない。

遠く歴史をふりかえるとき、世のため人のために、あるいは私財をなげうち、あるいはわが身を犠牲にすることさえいとわなかった多くの有名無名の人々がいたことを知る。

その行為は、ボランティアというより英雄的行為に近い。しかしそこに共通するものは、損得を超えた献身の精神である。

いずれにせよ、ボランティア活動は功利とは無縁のものである。(R)

「シニアフレンズ福岡」事務局の所在地（中央市民センター内）



もくじ

- ・「情けは人のためならず」…………… 1
- ・【寄稿】小学校で傾聴は必要か（渡利直弘）…………… 2
- ・【登録ボランティア団体紹介】…………… 3
 - ・おはなし会にじのはし（児玉幹子）
 - ・特定非営利活動法人シニアネット福岡（手柴正義）
 - ・ちんどんオーケストラ（室井照男）
- ・【寄稿】出会い・ふれあいをもとめて（下河邊正生）… 4

寄稿

小学校で傾聴は必要か

「シニアフレンズ福岡」実行委員会委員

福岡市立舞鶴小学校

校長 渡利 直弘

私は、もともと中学校の理科の教師をしておりました。その後、中学校の校長を三年間、教育委員会に三年間在職し、三年前、異校種人事異動により小学校に赴任してまいりました。このような経緯を経て、小学校の子ども達を観てまいりました。

● 気になる言葉づかい

現在、最も気にかかっていることは、子ども達の言葉の問題です。きたない言葉を使う子どもが多いことです。特に、感情的になったときは、相手を見下す言葉が多く見られます。例えば、「うざい」「きもい」「死ぬ」「あっちへいけ」「来るな」等があります。学級担任に聞いてみますと、この学校は、こうした発言は少ない方だと言っております。自分の学校を褒めているようで大変お恥ずかしいのですが、比較的礼儀正しい子どもが多いです。一方、感情的になったときに、いわゆる「キレた」ときに、最初の言動として相手を見下す言葉を発する子どももおります。中休みとか昼休みには、運動場や校内で遊んでいる子ども達。トラブルのときは、きたない言葉が飛び交います。

中学生になると、多少は相手の立場を考えて発言するようになると思うのですが、小学生は、頭に浮かんだ事を、相手の立場も考えずそのまま発することが多いようです。特に低学年ほどその傾向があります。また、私が生かす子どもの頃と比べると、今の子ども達は、昔より多く人が傷つく言葉を言ったり、聞いたりしていると思いま

す。言葉によって人の感情は左右されますので、子ども達にはもつと豊かな心を持ち、言葉を大切にすることに育つて欲しいと願いを込めて、機会あるごとに約束やきまりごと等を話してきました。

● 気づきを育てる

その一つとして、月初めの全校朝会では、「言葉の使い方や間違えると、人の心を大変傷つけることもあるから、相手のことを思いやる気持ちを持って話をしよう。」等、他人に対する思いやりの大切さについて話しをしてきております。しかしながら、時間が経てば忘れてしまふなど、話の趣旨がなかなか浸透、定着しないのが悩みの種でした。こうした中で、考えたのが、言って聞かせようとするより、自分で気づくようにした方が良いということでした。自分で気がつき、他人を大切にすることを育んでいくことが必要であると考えたのです。

● 満たされない欲求

心の問題。そこには必ず背景があります。日常生活における様々な人間関係が。もともと、人間には、社会的保障の欲求があるそうです。大学の時の社会学という講座の中で勉強した記憶があります。特に印象に残っている言葉で、今でも覚えています。具体的には、集団や社会の中に帰属し、自分の存在を認められたいという欲求です。

私は、今の子ども達がこの欲求で満たされていないのではないかと考えました。それは、子ども達が同級生に対して自分の主張をしようとする傾向が非常に強いという実態を観てからそう思うようになったのです。自己主張したい。しかし、主張する相手である同級生はあまり聞いてくれない。それどころか、逆に自分の主張を聞かせようとしてくる。担任の先生は、毎時間が授業で、休

み時間などには、全ての子どもの家庭への連絡帳を書いたり、テストの採点をしたり、宿題のやり直しをさせたりで、休み時間もなく仕事をしております。ですから、聞き手にはなれないのです。

● 話してすっきり

じっくり、黙って話を聞いてくれる人はいないだろうか。どんなにつじつまが合わないことでも、ニツコリしながら、話が終わるまで聞いてくれる人が。今日まで、そう思い続けてきました。

月初めの全校朝会では、こんなことも言いました。「いやなことを言われたら、まず、校長先生の所に話しに来なさい。」その後、本当に、子ども達が話しに来ました。話が終わった後は、すっきりした顔をして帰っていきましました。また、学級の中で孤立している子どもとも話しをしました。やはり聞き手として、話しを聞くことに専念しました。話を聞いてあげること、表情が明るくなり、安心して帰って行ったように思います。

このことは、子どもの短所を指摘して改善を求めめるのではなく、話を聞いてあげることが、どれだけ子どもの短所の改善に有効かを体験した事例です。

● 大きな効果

子どもは、話しをすると同時に、自分自身にも話しております。そして、自分自身も聞いているのです。その中で、話している内容がおかしいと思えば、自分で気づくようになるのです。

どうか、子ども達のためにしっかりと話を聞いてあげてください。そうすれば、自己の存在感を感じ、心がしつかり安定するようになると思います。

私は、このような考えから、児童に対して、傾聴が大変重要な役割を果たすと思っております。

登録ボランティア団体の紹介

おはなし会にじのはし

児玉 幹子

●私達のサークルは、シニアフレンズ福岡の「おはなしボランティア養成講座」で、栗原景子先生(元NHKアナウンサー)のご指導を頂いた受講生が中心となり、平成20年10月にシニアフレンズ福岡の一員として発足いたしました。

●ただいま60歳から81歳の会員数25名、月一回中央市民センターで定例会を持ち、発声練習・話し方の講習を受けながら、「読み聞かせ」や「手遊び」などを会員同士で楽しく切磋琢磨しています。

●現在のボランティアといましては、毎月第四水曜日に福岡市立中央児童会館の「サンサンひろば」で、三歳未満児とその保護者の方達に、絵本の読み聞かせやパネルシアター、手遊びなどを行っています。他に、西花畑小学校留守家庭子ども会と高齢者施設に毎月一、二回程度ボランティア訪問を実践しています。

●もともとずっと、はっきりと聞いていただけるよう、楽しんでいただけるように、「読み聞かせ」ストーリーテリングの技を磨き、会員同士で支えあい、学びあい、向上していきたいと思っています。

特定非営利活動法人

シニアネット福岡

理事長 手柴 正義

【生い立ち】一九九八年(平成10年)、福岡市西区市民センター主催の熟年セミナー《情報発信コース》に参加したメンバーが中心となり、インターネットを活用した「シニアの生き甲斐づくり、仲間づくり」を願いととして、同年十一月に任意団体「シニアネット福岡」を立ち上げ、二〇〇一年(平成13年)八月には特定非営利活動法人(NPO)として認証されました。

【会員数】現在約四六〇名の規模になりました。会員の輪は福岡を中心に東京から九州まで、海外はアジア諸国にまで広がり、また年齢層は40代から90代までと、幅広く、地域、世代を超えたメンバー構成になっております。

【活動】シニアがシニアに同じ目線で、わかるまで教える《らくらくパソコン教室》を開き、これまでに年間約一万人の方々を受講されました。

二〇〇一年(平成13年)福岡市主催のIT講習会には、市の要請を受けて市民センター七カ所でサポーターとして協力し好評を得ました。一村一品運動発祥の地である大分県大山町(現、日田市)と相互協力協定を結び、県境を越えた地域振興・交流の活動を行っています。

二〇〇三年(平成15年)九月、「エイジレス・ライフ実践者及び社会参加活動事例」として内閣府より表彰を受けました。

二〇〇四年(平成16年)五月、創立五周年記念行事として「博多どんたく港まつり」に参加しました。

現在、福岡市中央区大名二丁目「大名教室」と「本部事務所」を、西区の日田生活領事館内に「愛宕浜教室」を、東区の地下鉄馬出九大病院前駅構内に「馬出教室」をそれぞれ開設しております。また、春日市のクロウバープラザ内にも「春日教室」を開講しています。

今後も、NPO・シニアネット福岡は、パソコン・インターネットを通じ、さらに、幅広い社会貢献活動・世代を超えた自由で有意義な交流を意欲的に進めていきたいと思っています。

千八二〇〇一〇一三

福岡市中央区大名二丁目九二二九二二〇一

シニアネット福岡事務局

http://www.senior.net.or.jp

TEL&FAX 092-732-3115

ちんどんオーケストラの紹介

代表 室井 照男

▼ちんどんオーケストラの母体は、全国組織のNPO法人「シニアネット福岡」です。高齢化社会にたいして、今こそ「シニアよ！大志を抱け」と呼びかけ、色々な活動をしてきています。(詳細は上段をご覧ください)

▼その「シニアネット福岡」の会員で、音楽好きな者たちが、家庭にある鍋・釜・フライパンなど身近にある音の出るものを使って、音楽を楽しみ、若返ろう！と結成したのが、ちんどんオーケストラです。はや七年余がたちました。その間、会員の作詞・作曲によるオリジナル曲「シニアネット福岡の歌」を発表、活動のテーマソングとして冒頭に演奏しています。

▼現在、構成メンバーは約40名を擁し、演奏は25〜30名編成で活動を行っています。キーボード・ギターを中心にフルート・ウクレレ・ハーモニカのほか打楽器もそろえ、これにコーラスも加わり、昔からある美しい日本の「童謡・唱歌」類を主に、また「なつメロ」なども謳っています。

▼演奏活動は、月に二回程度で、これまでに公民館や、福祉関係の施設、あるいは福岡市その他色々な団体からもお招きを頂いて喜ばれています。またテレビや新聞等にも取り上げられ、お褒めの言葉もいただいております。

▼これからも音楽を通じて、笑いと活力の出る社会のお役に立ちたく、張り切っていますので、「元氣と笑顔」が魅力の「ちんどんオーケストラ」をご指導・鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

寄稿

出会い・ふれあいをもとめて

福岡歴史探訪ガイド

下河邊 正生

六十四歳でリタイア、四十数年におよぶ仕事一筋の生活から解放されて、第二の人生を如何に生きていくか模索した。そこで新しきコト・モノ・ヒトとの出会い・ふれあいを求めていこうと考えた。以来二年ほどあれやこれや首を突っ込み、試行錯誤を重ねた。その過程で出会った二回りくらい若い友人から、放送大学での学びを薦められ、平成十五年、六十六歳で入学した。

放送大学とは通信制(衛星放送で)の教養課程六学部で授業が展開されている大学である。この中で「人間の探究」を専攻し学びが始まった。忍耐力と記憶力の減退に歯止めのかからない状況の中、果たして継続して学び続けられるかという不安をかかえたスタートであった。

放送での授業約五十科目(各二単位)、スクーリングによる授業約三十科目(各一単位)を、各期末における試験で六十点以上が合格ラインで単位取得し、併せて百二十四単位取得が卒業資格となる(最低限四年間在学)。

これを六年がかりで平成二十一年三月、何とか卒業にたどり着いた。

以下、在学中および卒業後のことを振り返りたい。

専攻の「人間の探究」では、約百三十七億年前のビッグバンによる宇宙の創造、光の速さで膨張する宇宙の中で星々の誕生・銀河系の生成、そして約四十六億年前の地球の誕生。幾多の変遷を経て出現した人類、その文明発展・文化進展の歴史、これら永年にわたる流れを通して学ぶことの多様さに興味尽きなしの感慨を受けた。

知るを楽しむ貴重な学びであったと同時に、知らざる

ことが如何に多いかを知らしめられ、あらためて自身の人としての卑小さを実感させられた六年間であった。

二

科目の中で「体育実技(一単位)」があった。この年齢で何をやればと考えていた時に「初心者弓道教室」の募集に応募し、弓道をはじめた。六十七歳であった。以来五年間その魅力・面白さにはまっていた。高校生から九十歳代までの幅広い人々との出会い・ふれあい、先輩方からの適切な指導や助言を受け、三位一体(身・心・弓の合一)の確立・真善美の追及などと人間性の向上も求められる。弓を引く動作は比較的単純ではあるが、引けば引くほど難しく、その奥行き深さに一進一退ではあるが、体力の続く限り精進していきたいと励んでいる。

三

卒業研究(卒論)。平成二十年四月、前期までの単位習得が百単位になったので、二十一年度の卒業をめざして卒業研究に取り組んだ。

研究課題は万葉集に関連するものをと担当教授の指導を受け、六ヶ月間、万葉集関連本などにより資料を収集。テーマを絞り込み研究を進め、十二月提出にこぎつけた。一月末の期末試験そして卒業研究も合格点を受け、卒業の運びとなり、学位記を授与された。

この時の万葉集との出会いが、万葉集に対する思いを高め、千三百年位前の古代の人々の息吹き、鋭い観察眼・感受性や感性の豊かさ、ロマン溢れる愛情表現、どれをとつても物質文明に浸され感覚の鈍った即物的な現代人の遠く及ばない精神性の豊かさなど、多くのことを実感できた。終生の愛読書として読み込んで行きたい。

四

「福岡歴史ガイドボランティア養成講座」。平成十九年、大学卒業後の生き甲斐探しをと考えていたところ、この

講座に応募し、故古川七子事務局長の面接をうけ受講の運びとなった。同年六月から波戸岬への宿泊研修を含め、シニアフレンズ福岡の諸先輩を中心にした熱心な十五回にわたる講義を受けた。福岡在住、五十年有余、こんなにも数多くの福岡の歴史をほとんど何も知らずに過ごしてきた自分に恥ずかしささえ覚えた受講期間であった。十一月講座終了後、受講生で「福岡歴史探訪ガイド」を立ち上げ、手分けして福岡の史跡ガイドコースを設定し、一般の方々を対象に史跡案内の活動をしている。

五

地域塾「万葉集講座」。平成二十一年四月、井上会長の指示で当講座の講師を引き受けた。初めての経験でもあり戸惑ったが、あらためて本等も買い求め、無い知恵を絞り、博多湾クルージングでの万葉歌碑の案内の中にはさみ、全五回の講座を十一月に終了した。この講座を通して、自分の考えや知識を人様に伝えることの難しさを痛感した次第である。

以上、リタイア後の我が人生(青春の真つ只中)を有意義に、生き甲斐をもって生きて行くためには、好奇心旺盛に新しいコトやモノを知り、それらを通してより多くのヒトとの出会い・ふれあいを高めて行きたいと念願している。(平成二十一年十二月一日)

〒 810-0042

シニアフレンズ福岡 第六号

編集発行 「シニアフレンズ福岡」

実行委員会事務局

福岡県福岡市中央区赤坂二一五―八

福岡市立中央市民センター内

TEL (〇九二) 七二四―五五二二

FAX (〇九二) 七二四―五五〇二